

フォーラム委員会だより

第188回 aacaフォーラム

精緻な美の世界—江戸小紋

小宮康正 (江戸小紋染め職人)

フォーラム委員会委員
日本建築美術工芸協会会員

中野恵美子

第188回フォーラムはアトリエユニオン1階東京ショールームにて2011年11月7日(月)に行われた。遠目には無地に見えるが近づいてよく見ると細かい模様の染めの着物がある。いわゆる江戸小紋である。お茶席にも着用でき、一つ紋を入れると色無地紋と同格になる。その江戸小紋について江戸小紋染め職人小宮康正氏にお話をいただいた。康正さんは3代目だが、中学を卒業後、重要無形文化財保持者(人間国宝)である2代目の父康孝さんの元で修業した。

本来、小紋とは細かい模様や、小さな柄を染めた着物のことを指し、その中でも江戸小紋は特に精緻で細密な型紙を使った染物を言う。江戸時代に武士の袴に細かい小紋柄が用いられたのが庶民の衣類にも取り入れられ遊び心によって幾何文様、草花、動物、昆虫、風物、道具等様々な模様が生まれた。さらに女性の衣類としても広がってゆき、柄もそのバリエーションも増えていった。しかも江戸時代後期に型紙や型彫りのための刃物の技術革新などに伴いその精緻さが増した。

江戸小紋は和紙を柿渋で加工した型紙を用いて染めるが、型紙づくり、型彫り、染め付の一連の作業を分業で行う。まず型紙だが和紙を2~4枚重ねて柿渋を塗った渋紙を10枚ぐらい重ねて彫る。型彫りには彫りあげる柄により技法や使う道具が異なる。それぞれの代表的な柄は「錐彫り」は鮫小紋、「突き彫り」は菊柄小紋、「縞彫り」は縞小紋、「道具彫り」は七宝つなぎ小紋などであるが、実に種々多様な柄がある。道具作り、型彫り、それぞれの技術が相伴って、良質の型紙を彫ることが出来る。次に染め付けだが、まず着尺の半反分約6~7メートルの縦の木の一枚板の張り板に薄く糊を塗り、そこに生地を張る。生地の上に型紙を置き防染の糊をヘラで置いていく。型紙を送りながらこの作業を繰り返すが12メートル以上ある生地を染めるには50回から80回位繰り返す必要があり、それを寸分の狂いなく行わねばならない。型紙の継ぎ目が分からないように、微細な模様に糊をつけていくのが匠の技と言える。その上に染料を混ぜた色糊をヘラで置く。それを蒸して定着させた後、水で糊を洗い落とすと柄が白く染め残る。つまり模様の部分が染まらない防染

である。

これらの工程のうちどれ一つ欠けても制作に破綻を来す。型紙のための和紙の質も大事で、2代目の康孝さんは江戸時代の型紙に近づけるべく和紙の製造にも努力したと聞く。仕事場である板場は南から光が当たるようになっていて奥は少し高くなっており光が届くようになっている。蛍光灯は布の上の糊のムラが見えない。白色光が良いが最近LEDを使うという。型紙に置く糊は糠ともち米の粉で作るが、最近糠やもち米の質が以前と異なるので最適なものを求めて研究を重ねている。染料を定着させるために蒸しを行うがその湯を以前はお釜で沸かしていたのをボイラーに変えるなど、「伝統とは改良の連続」という信念を家訓として、染めに欠かせないよりよい環境づくりを追究し続けている。伝統とは積み重ねによってできる最先端と言える。

1950年に文化財保護法ができ、形のないものを次の世代につないでゆくために工芸展が重要無形文化財保持者の作品の発表の場として開かれるようになった。康正さんの祖父、康助さんが重要無形文化財保持者となり、父の康孝さんも同保持者である。人間国宝、無形文化財は全ての技があって初めて伝統がつかがる。「用途を失ったものは減じる。ゆっくりと工夫をしながら次世代につなぐ」と康正さんは語る。中でも如何に型紙を守るかが大事である。昔、初代康助さんの元に大量の古い型紙が持ち込まれたことがあった。それらを買占めることもできたが康助さんは「巷に泳がせておけば誰かが小紋屋を始める、古型を買うお金があったら一型でも多くの型を彫れば世の中に型紙が増える」と言って買わなかったという。

当日、2点の小紋染めの布があった。顔に合わせてみると1点は顔が引き立ち、もう1点は布が主張していた。細かい点の打ち方の違いでそのような違いが生じる江戸小紋の奥深さに伝統文化の凄さを改めて知らされた。毎年秋に日本橋三越で開催される日本伝統工芸展には4代目の康義さんも入選している。今後伝統がどのように展開していくか楽しみである。

